

## 連用形とカ（上）

萬葉集

○

萬葉集における、用言連用形に係り用法のカが下接する形式について調べる。具体的には、次のような例である（以下、巻数と歌番号（旧編国歌大観番号）のみを掲げる用例は、萬葉集からのものである）。

- (1) 百限ももくまの 道は来にしを またさらに 八十島やそしま過ぎて  
和加例加由可牟（わかれかゆかむ）（巻二十、四三四九）

「別る」の連用形「別れ」にカ（以下特に注記しない限り、係助詞はすべて係り用法のものを指す）が下接してい

るものである。通常、カの接続については、同じく連体形を結びとするヤヤソとともに、「種々の連用成分に下接する」と説明される。しかし細かく観察すると、それだけでは説明できない現象が認められ、またカとヤ・ソとの間でも、少なからず異なる面が存在する。用言連用形に下接する場合について、それらの現象がどのように整理され位置づけられるかを明らかにすることが、本稿の目的である。その過程で、係助詞・連用形双方の、意味・文法上の特徴についても、検討して行くことになるであろう。

なお、本稿ではカ・ヤ・ソを主に扱い、それ以外の係助詞、すなわちハ・モ・コソ・ナモ（ナム）などは、特に必要な場合を除き、考察の対象から外している。これは、ハ・モ・コソについては、終止形または已然形を結びとすることなど、カ・ヤ・ソとは大きく性質を異にするためであ

り、ナモ（ナム）については、萬葉集に確実な例が存在しないためである。

—

萬葉集の「連用形十カ」を調査してまず気が付くことは、カと結びの述語との位置の近さである。萬葉集には連用形に下接するカが四〇例存在するのであるが、その全てが、本稿冒頭①の「別れかゆかむ」のように、結びの述語（ゆかむ）の直前に位置しているのである。本稿では、このように係助詞が述語用言の直前に現れる場合を、仮に「近接型」と呼ぶことにしたい。この近接型の用例数を、連用形以外の要素に下接するカと比較した結果が、次の表一である（なお、本稿における「述語」という用語は、いわゆる複合用言の場合や、助動詞が下接する場合を含む）。

表一 カの、出現環境別の用例数

	近接型	それ以外の環境	合計
〔連用形十カ〕	40 (100%)	0 (0%)	40
〔その他十カ〕	206 (41.7%)	288 (58.3%)	494

連用形以外の要素に下接する場合、全四九四例中、近接

型は二〇六例であり、四割強の割合に留まっている。連用形に下接する場合がいかに特別であるかが知られよう。

論の見通しをよくするため、「連用形十係助詞」の近接型の諸類型を、ここで一通り整理しておきたい。近接型はヤ・ソなどを用いる場合にも認められるのであるが、このでの用例は全てカを用いるものを挙げる。

(イ) いわゆる複合用言

a [ズ十係助詞十アリ]

村肝の 心碎けて かくばかり 吾が恋ふらくを 不知（イ）香安（イ）類良武（イ）（しらすがあるらむ）（巻四、七二〇）

b [居体言十係助詞十ス]

大船に かしふり立てて 浜清き まりふの浦に 也（イ）桴里可（イ）世麻之（イ）（やどりがせまじ）（巻十五、三六三二）

c [用言連用形十係助詞十述語用言]

立田山 見つつ越え来し 桜花 知利加（イ）須（イ）疑奈（イ）牟（イ）（ちりがすぎなむ） 吾が帰るとに（巻二十、四三九五）

(ロ) 用言連続体

d [用言連用形十係助詞十述語用言]

暇（イ）無（イ）み 五月をすらに 吾妹子が 花橘を 不見（イ）可（イ）桴過（イ）（みずがすぎなむ）（巻八、一五〇四）

〔連用形＋係助詞〕の近接型は、係助詞の下接している  
 用言と述語用言とが複合用言を構成する（イ）の類型と、  
 両者が用言連続体を構成する（ロ）の類型との二つに、ひ  
 とまず分類される。このうち（イ）については、aから分  
 析される「ズ＋アリ」の形式や、bから分析される「居体  
 言＋ス」の形式はもちろん、cの例における「散り過ぐ」  
 （「散りか過ぐらむ」から分析される）のようなものも、  
 いわゆる複合用言と広く認められているのではないかと思  
 われる。これに対し、（ロ）のdの例として挙げた「見ず  
 か過ぎなむ」は、そこから分析される「見ず過ぐ」が、通  
 常、いわゆる複合用言を構成しているとは認められないで  
 であろう。その点を基準にして、（ロ）は、（イ）とは区別  
 されるのである。

ところが、このような区別は、あくまでも現代の我々に  
 とって可能であるにとどまり、当時の言語意識からすれ  
 ば、（イ）と（ロ）とは切れ目なく連続するものであった  
 のではないかと思われる。というのは、上代においては、  
 いわゆる複合用言は未だ熟合の度合いが弱く、二用言の連  
 続体と意識されていたと考えられているからである（金田  
 一春彦氏「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金  
 田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂、一九五三）な  
 ど。例えばaの類型から分析される「ズ＋アリ」の形式

は、いわゆる補助活用として後に熟合するように、ここに  
 挙げた（イ）の諸類型の中でも、最も強い結びつきを有す  
 ると考えられる。ところがそのような形式でさえも、萬葉  
 集においては、次のように、内部に別の語（「君は」）を  
 介入させる例が存在し、決して完全な複合用言として結合  
 しているわけではないのである。

- (2) 不相思（あひおもはず） 公者在良思（きみはあるら  
 し） ぬばたまの 夢にも見えず うけひて寝れど（巻  
 十一、二五八九）

このような例をもとに考えれば、上代におけるいわゆる  
 複合用言は、程度の違いはあるものの、結局は用言連続体  
 の一部に含まれるものであったのではないかと思われる。

本稿で問題にしているように、前項用言と後項用言との間  
 に係助詞が介入することがあるのも、二用言の熟合の程度  
 が低いことの顕れと解釈され、いわゆる複合用言が用言連  
 続体との間に明らかな境界を持たなかったことを示唆する現  
 象と言えよう。従って近接型の「連用形＋カ」は、a～d  
 の類型を通じて、用言連続体を構成する前項用言にカが下  
 接している、と解釈するのが適当なのではないかと思われ  
 る。

(二)で一旦、ほかの係助詞の場合に目を転じてみることにしたい。ヤ・ソの場合について、連用形に下接する例を調べ、カの場合と比較してみよう。

表二 ヤ・ソの、出現環境別の用例数

	近接型	それ以外の環境	合計
[連用形+ヤ]	30 (85.7%)	5 (14.3%)	35
[その他+ヤ]	86 (39.1%)	134 (60.9%)	220
[連用形+ソ]	13 (32.5%)	27 (67.5%)	40
[その他+ソ]	231 (61.8%)	143 (38.2%)	374

表二から明らかなように、ヤ・ソの場合には、用言連用形に下接する場合でも、近接型を取らない例が存在する。この点で、カとヤ・ソの間には、接続上の性質の相違が認められると言えるであろう。

さて、つぶさに観察して行くと、それら近接型を取らない例は、大きく二つの場合に分けられることが明らかになってくる。

一つは、(3)のように、係助詞と結びの用言との間に「吾ガ」が介入する場合である(3)を含め、ヤに二例、ソに二一例が存在する)。

(3) うら若み 花咲きがたき 梅を植ゑて 人の言しみ

念曾吾為類 (おもひそあがする) (巻五、七八八)

本稿では、このように「吾ガ」が介入する場合を、近接型に準ずる形式と考え、基本的に両者を区別せず扱ってゆくことにしたい。というのは、このような「吾ガ」の介入は、近接型だけでなく、様々な複合語あるいは連語において、認められるものだからである。

例えばミ語法の後にサ変動詞「ス」が現れる(4)のような形式においても、ミ語法と「ス」との間に「吾ガ」が現れる場合があり、しかもそこに現れる語は「吾ガ」(まれに「吾」)に限られるのである(5)および(6)の例)。

(4) 相ひ見まく 欲しがためは 君よりも 吾そまさり

て 伊布可思美為也 (いふかしみする) (巻十二、三

一〇六)

(5) 御佩かしを 劔の池の 蓮葉に 溜まれる水の 徃

方無 (ゆくへなみ) 我為時尔 (あがするときに)

会ふべしと 会ひたる君を… (巻十二、三二八九)

(6) 恋死なむ そこも同じそ 何せむに 人日人言 辞痛

吾将為 (こちたみあれせむ) (巻四、七四八)

また例えば(7)に見られる連語「待チカテニス」の場合も、「待チカテニ」と「ス」との間に介入する語は、「吾ガ」の外には認められない。

(7) 鶯の 麻知迦互尔勢斯(まちかてにせし) 梅の花

散らずありこそ 思ふ子がため(巻五、八四五)

(8) 待難尔(まちかてに) 余為月者(あがするつきは)

妹が着る 三笠の山に 隠りてありけり(巻六、九八七)

(4) (8)として挙げた例は、いずれも結びの述語にスを用いるものであったが、「吾ガ」の介人は、そのような場合に留まらない。例えば「ミ語法+ス」によく似た「ミ語法+思フ」の形式(9)の例)においても、「吾ガ」は、そして「吾ガ」に限って、両要素の間に介入しうるのである(10)の例)。

(9) 吾妹子を 相知らしめし 人をこそ 恋のまされば

恨三念(うらめしみおもへ) (巻四、四九四)

(10) 宇流波之美(うるはしみ) 安我毛布伎美波(あがもふきみは) 撫子が 花になそへて 見れど飽かぬか

も(巻二十、四四五二)

さらに、(11)の連語「音ノミシソ泣ク」は、「音ヲ泣ク」「音ニハ泣ク」などとともに、「音：泣ク」を基本構成とする連語のバリエーションの一つであるが、いわゆる自立語で「音」と「泣ク」との間に現れるのは、やはり「吾ガ」に限られるのである(12)の例)。

(11) 独り寝て 絶えにし紐を ゆゆしみと せむすべ知ら

に 哭耳之曾泣(ねのみしそなく) (巻四、五一五)

(12) みどり子の 這ひたもとほり 朝夕に 哭耳曾吾泣  
(ねのみそあがなく) 君なしにして(巻三、四五八)

このように見てくると、主語を示す「吾ガ」は、理由は不明であるが、複合語や連語の内部に入り込みやすい、特殊な性質を持つと言うことができよう。(3)(…人の言しみ思ひそ吾ガする)の場合も、「吾ガ」のその特殊な性質のために、係助詞と述語用言とは、外形上、近接しているとは言えない状態となっている。しかしこのとき「吾ガ」は、近接型の連結(3)の例で言えば、居体言「思ヒ」と係助詞ソ、形式用言「ス」の連結)に、大きな断絶を与えていないと考えるべきであろう。なぜかといえは、ここに挙げた

全ての複合語・連語を通じて、「吾ガ」がその内部に介入する場合にも、介入する語は殆どの場合「吾ガ」に限られるのであって、それ以外の語、特にいわゆる自立語の介入が許されることは極めて少ないからである。つまり、複合語の結合・連語の連結そのものは、「吾ガ」を介入させつつも、その「吾ガ」を含む形で、依然として保たれていると認められるのである。もちろん、例えば「思ひそ吾ガする」と「思ひそする」とは、「吾ガ」の有無という点で、少なくとも外形上は、甚だ異なっていると云わねばならない。しかし全体が「吾ガ」を含みつつも連結を保っているという点では、両者は基本的に同質であると考えてよいと思われる。本稿では、近接型を含め、複合語・連語の内部に「吾ガ」が介入するものは、その複合語・連語のパリエーションと認め、特別な事情のある場合を除いては同列に扱うこととしたい。

〔連用形+ヤ/ソ〕が近接型を取らないもう一つの場合は、(13)のように、形容詞または形容詞型活用の助動詞（以下「形容詞型用言」と一括する）に下接する場合である。

- (13) 神さぶる 荒津の崎に 寄する波 麻奈久也伊毛尔  
 (まなくやいもに) 恋ひわたりなむ (卷十五、三六)

六〇)

同様の例は、(13)を含め、ヤに二例、ソに六例が存在する。カの場合にこのような例が見られなかったのは、そもそもカには形容詞連用形に下接する例自体が存在しなかったからである。そのために表一と表二とは、形容詞型の用言とその他の用言とを区別していなかったのである。今、それを考慮して二つの表をまとめると、次の表三のように表すことができる（近接型の中に、「吾ガ」が介入する場合も含めている）。

表三 連用形に下接する係助詞の、活用形式別の用例数

	形容詞型		それ以外		合計
	近接型	その他	近接型	その他	
〔連用形+カ〕	0	0	40	0	40
〔連用形+ヤ〕	3	2	29	1	35
〔連用形+ソ〕	4	6	30	0	40

表三のようにまとめると、連用形に対するカの下接のあり方に関して、次のような、二つの特徴的な現象が明瞭になるであろう。

A カ・ヤ・ソは、形容詞型以外の用言の連用形に対しては、用言連続体の前項用言に限って下接する

B カは、形容詞型用言の連用形に下接する例が存在しない

なお、Aの「用言連続体の前項用言に限って」の部分は、「近接型を取って」などのように記述することもできる。ただいずれの記述を取るにしても、ここで確認しておきたいことに変わりはない。カ・ヤ・ソいずれの場合も、連用形に接続するときに

〔用言連用形十係助詞十述語用言〕  
という形を取り、特別な場合を除いては、

〔用言連用形十係助詞十述語用言〕  
という形を取ることが殆どないことが確認できればよいのである。

A・Bを通じ、例外は、「連用形十ヤ」と述語用言との間に「汝ガ」が介入する(14)のただ一例に限られる。

(14) 朝霧の 八重山越えて 喚子鳥 吟八汝来(なきやながくる) 宿もあらなくに(巻十、一九四一)

もつともこの例も、構成としては次の(15)のような「吾ガ」

を用いる例に類似し、

(15) …行き隠る 島の崎々 隈も置かず 憶曾吾来(おもひそあがくる) 旅の日長み(巻六、九四二)

あるいはこのような例からの類推が働いたための例外かとも疑われる。本稿では一旦判断を保留し、別の機会に論じたい。

ところで、連用形に対する係助詞の下接に関して、さらにもう一点付け加えねばならない現象がある。連用形は次のように単独で接続法に用いられることがあるのだが、

(16) 武都紀多知(むつきたち) 春の来たらば かくしこそ 梅ををきつつ 楽しきをへめ(巻五、八一五)

カ・ヤ・ソを通じ、この連用形接続法に下接する例が認められないのである。ある連用形の用法が接続法であるか否かは意味の面から判断せねばならないため、あるいは見落とされている可能性もあるが、少なくとも管見の限り、確実な例は存在しない。なぜこれらの係助詞は、連用形接続法には下接しないのだろうか。

この疑問について考えて行くことは、同じくカ・ヤ・ソ

を通じた現象であるAについて論ずる際にも、大きな手がかりになるはずである。そこで次節ではまず、この連用形接続法と係助詞との接続における現象を取り上げ、論ずることとする。Aについてはその後第三節で、力に関する固有の現象であるBについては第四節・第五節で、それぞれ改めて論ずることにした。

## 二

連用形による接続法については多くの先行研究があるが、それらの中でも本稿が注目したいのは、渡辺実氏のものである。渡辺氏は、「新聞を読み、ラジオを聞く」のような本稿のいわゆる連用形接続法の用法が、「従来「中止法」の用法と説明されて来たこと」にふれ、「従来いわゆる中止法とは、(中略)ただ用言の並列を指すにすぎないもののように考えられる」(『国語構文論』p.234、廣書房、一九七二)と述べられる。

本稿でも基本的に渡辺氏に従い、連用形による接続法は、並列の関係を表すことを基本とするものだと考える。例えば(17)において、「夕されば芦辺に騒ぎ」「明けくれば沖になづさふ」によってそれぞれ表されている二つの事態は、単純に並列されているに過ぎないものと解される。従

って仮に両者の順序を入れ替えても(「明けくれば沖になづさひ、夕されば芦辺に騒ぎ」)、意味の違いは殆ど生じないと言つてよいであろう。

(17) 夕されば、安之敵尔佐和伎(あしへにさわき) 明け、  
くれば、沖になづさふ、鴨すらも 妻とたぐひて 吾

が尾には 霜な降りそと…(巻十五、三六二五)

このとき、並列された複数の要素は、構文的には同質のものとして一体化する性質を持っている。(17)に即して言えば、「夕されば芦辺に騒ぎ」と「明けくれば沖になづさふ」とは、構文的に一体化を果たし、「鴨」に対する一つの大きな連体修飾成分を形成するのである。

これに対して係助詞は、一文を係りと結びという二つの部分に切り分けるものと考えられる。切り分けられた係りと結びとは、基本的に異質の両要素であり、その両者が異質なままに統一されることによつて、係り結び文が構成される。従つて係助詞が一文を係りと結びとに分割することは、やがて統一される両要素を明らかにすることであり、文構成上の関係を鮮明にして、かえつて全体の統一を強調・強化することになるのである。

しかしこのような係助詞の性質は、並列の関係とは相容



れないものなのではないだろうか。なぜかと言えば、並列の関係で結ばれる両要素は、構文的に同質のものとして一体化するのであって、異質な両要素として切り分けられるような性質のものではないからである。そして連用形接続法は、その並列の関係を表すことを基本とするものであるために、係助詞が下接することは許されないのである。

ただし、連用形による接続法は、(17) (夕されば芦辺に騒ぎ、明けくれば沖になづさふ…) に挙げたような、単純な並列表現のみに留まるものではない。次のような例においては、「越え来」と「今見つる」とが対等に並列されているとは言えないであろう。

(18) 馬並めて 打集越来(うちむれこえき) 今見つる、

吉野の川を いつかえり見む (巻九、一七二〇)

二つの事態の関係は、「越え来」が成立したその後で、「今見つる」が成立する、というようなものだと考えねばなるまい。そしてこのような関係にある場合であっても、カ・ヤ・ソのいづれも、連用形接続法に下接する例は存在しないのである。なぜなのだろうか。

それは、ここに認められるような関係が、並列関係の自ずからの派生であるためと考えるべきであろう。再び渡辺

実氏（前掲『国語構文論』（pp.248-250））によれば、二つの事態が並列的に叙述され、しかも先行する事態と後続する事態との間に何らかの序列関係が認められるとき、先行する事態が後続する事態の背景として把握されるようになるという。このとき先行句は、後続句がどのように成立するかを限定する要素、すなわち連用修飾要素たるに過ぎなくなってしまうという。渡辺氏の説は、現代語について、また連用形（渡辺氏の用語では「並列形」）を用いるものに限らず並列関係一般について、述べられたものであるが、萬葉集の(18)のような例（…うち群れ越え来、今見つる…）においても、基本的に同様を考えることができるであろう。このような関係は、(17) (夕されば芦辺に騒ぎ、明けくれば沖になづさふ…) におけるような単純な並列の関係に、時間的前後関係などの序列が自ずから介入したものと解釈される。典型的な並列からは確かに外れるものであるけれども、決定的に異質なものとは認められず、両者はむしろ相互に連続するものという位置づけを与えるのが妥当であろう。従って(18)のような場合にも、並列関係と相容れない性質を持つカ・ヤ・ソなどの係助詞は、下接することが許されないのである。

もつとも、二点、注意しておかねばならないことがある。

一点めは、同じ係助詞であっても、モには、連用形接続法に下接する例が認められるということである。

(19) ぬば玉の 欲安可之<sup>レ</sup>母<sup>ヲ</sup>布<sup>ヲ</sup>祢<sup>ヲ</sup>波<sup>ヲ</sup> (よあかしもふねは)

漕ぎゆかな 三津の浜松 待ち恋ひぬらむ (巻十五、三七二一)

(20) 乎里安加之<sup>レ</sup>母<sup>ヲ</sup> (をりあかしも) 今宵<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>ま<sup>ヲ</sup> 霍公

鳥 明けむ朝は 鳴きわたらむそ (巻十八、四〇六八)

管見の限り、用例は右の二例で全てであり、決して多くが認められるわけではない。またもちろん、例えば(19)は「：夜明かししてでも船は漕いで行こう：」というような意味であるから、「夜明かし」は、並列というよりは、連用修飾の関係を表していると考えるべきものである。しかしカ・ヤ・ソにおいては、このようなときにも、連用形接続法に下接する例は一切認められなかったのである。カ・ヤ・ソとモとの、このような性質の違いは、何によってもたらされているのだろうか。

(21) に注目してみたい。

(21) 人毛<sup>ヲ</sup>奈吉<sup>ヲ</sup> (ひとみなぎ) 空し<sup>キ</sup>家<sup>ハ</sup>は 草枕 旅にま

さりて 苦しかりけり (巻三、四五二)

この例では、モのかかっている「なき」は、「空しき」家」に対する連体修飾語であり、文末を構成するものではない。従って、モの文末に及ぼす影響力は、カ・ヤ・ソなどに比して、強くなかったのではないかと考えられる。別の言い方をすれば、モは、必ずしも一文を係りと結びと切り分けるものではないのである。(19)(20)のように連用形接続法に下接する例が認められるのも、そのようなモの性質に起因する現象であって、決して例外と見るべきものではない。むしろ、モがカ・ヤ・ソと異なって連用形接続法に下接しようという現象は、これまで述べてきた本稿の考え方を、裏面から補強するものなのではないかと思われる。念のために繰り返せば、係助詞の持つ、一文を係りと結びと切り分ける性質は、連用形接続法によって表される並列関係とは相容れないものであった。そしてカ・ヤ・ソとモとは、同じく係助詞ではあるものの、その一文を切り分ける性質において、強弱の違いが認められる。甚だ乱暴な言い方をすれば、カ・ヤ・ソはその性質が強く、モは相対的に弱いのである。そのために、カ・ヤ・ソには連用形接続法に下接する例が見られず、モにはその例が認められるのである。

二点めは、テに関することである。連用形接続法によく

似た形式として、テを用いる接続法が存在することは、改めて述べるまでもないことであろう。例えば次に挙げる(22)の例においては、対句中の対応する個所の間で、連用形接続法と「連用形＋テ」の接続法とが交替的に現れている。もちろん音数律の制限などさまざまな条件を考慮しなくてはならないが、両者の性質の近さを窺わせるものと言つてよいであろう。

- (22) …まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 阿布藝許比乃美  
 (あふぎこひのみ) 地よか 祇 布ぬ之弓額拜 (ふし)てぬ  
 かづき) … (巻五、九〇四)

ところが「連用形＋テ」の接続法には、連用形接続法の場合とは異なり、カ・ヤ・ソが下接する例が存在するのである。(23)く(25)として例を挙げておきたい。

- (23) ぬば玉の 夜渡る鴈は おほほしく 幾夜平壓あ而あ鹿  
 (いくよをへてか) 己が名を告る(巻十、二二三九)  
 人皆の 見らむ松浦の 玉嶋を 美受弓夜和礼波(み  
 ず)でやわれは) 恋ひつつをらむ(巻五、八六二)  
 馬並めて み吉野河を 見まくほり 打越来而曾あ(う  
 ちこえき)でぞ) 瀧に遊びつる(巻七、一一〇四)

この種の例は萬葉集中に、カに一五例、ヤに一八例、ソに二五例、それぞれ存在する。用例の中には近接型「連用形＋テ＋カ＋述語用言」の形を取るものも多いが、それ以外の例も、カに四例、ヤに九例、ソに三例が存在している。テの付かない連用形においては、そもそも近接型以外に係助詞が下接する例が存在しなかったことを思えば、テの有無による違いは明らかであろう。なぜこのような違いが生ずるのだろうか。

「連用形＋テ」の形式は、(26)のような単純な並列表現に用いられる例も存在するが、管見の限り、そのようなものはごく少数であり、殆どの場合、(27)のように、前項と後項との間に時間的前後関係など何らかの序列が認められる接続表現に用いられる。

- (26) 日あ二破見而あ (め)にはみで) 手あには取らえぬ) 月のう  
 ちの 桂のごとき 妹をいかにせむ(巻四、六三二)  
 (27) 春過而あ (はる)すぎで) 夏来たるらし) 白妙の 衣干  
 したり 天の香具山(巻一、二八)

(27)の「春過ぎて」は、先の渡辺氏の指摘の通り、先行要素が後続要素の背景と化して、より連用修飾要素に近い

ていると言ふことができるのではないかと思われる。さらに、次の(28)の「船並めて」は、「朝川渡り」がどのように行われるかを表す、典型的な連用修飾要素であり、「連用形十テ」の担う連用修飾の関係が、最も端的な形で現れているものと位置づけられよう。

(28) ……もしきの 大宮人は 船並弓(ふねなめて) 朝

川渡り; 舟競(ふなぎほひ) 夕河渡る…(巻一、三六)

もちろん、並列と接続、および連用修飾は、相互に少しずつ異質でありつつも、結局は切れ目なく連続するものであろうし、「連用形十テ」の接続法と連用形接続法との性質が、互いに重なり合う面を持つことも否定できない。(28)の「船並めて朝川渡り」が、「舟競ひ」夕河渡る」と対句になっていることから明らかなように、連用修飾関係は、連用形単独であっても表しうるのである。

そうすると、両形式の間に認められる、係助詞の下接のあり方の相違は、テという助詞を伴うか否かによってもたらされていると考えるほかないであろう。

詳しくは第四節に述べることにしたいが、カの下接のあり方についての、そこでの調査の結果からは、「連用形十

テ」の接続法は、連用形接続法よりはむしろ、副詞に近い性質を持つことが露呈する。このことから、テという助詞は、連用形接続法に付いて副詞性を添えるはたらきを果たす、と解釈すべきものではないかと考えられる。連用修飾の関係は用言連用形単独でも表しうるのであるが、テは、その関係をより明瞭に示すはたらきを果たすものなのである。そうすると「連用形十テ」と単独の連用形とは、あくまで重なる面を持ちつつも、連用修飾の関係をより明瞭に示すテの有無という一面において、決定的に異質であると考えるべきであろう。係助詞カ・ヤ・ソの下接のあり方における両者の違いは、その一面の異質の、現象面での顕れと理解される。「連用形十テ」の表すところは、テの助けによって連用修飾関係に近づく反面、並列関係からは遠ざかるのである。だからこそ、並列関係と相容れない性質を持つカ・ヤ・ソであっても、「連用形十テ」には下接することが許されるのである。

### 三

本節では、第一節に挙げたAの現象、すなわち、「カ・ヤ・ソは、形容詞型以外の用言の連用形に対しては、用言連続体の前項用言に限って下接する」という現象について、

考えて行きたい。前節と同じく、並列表現を取り上げるところから検討を始めよう。

(29) 於登尔吉岐(おとにきき) 日には未だ見ず、佐用姫  
が 領巾振りきとふ 君まつら山(巻五、八八三)

念のために繰り返せば、用言連用形を用いる接続法は、二つの事態の並列を表すことを基本とする。(29)の場合、前項が「音に聞く」、後項が「日にはまだ見ない」という事態をそれぞれ表し、両者は対等の関係で並列されているのである。

ところが、二用言が連続する場合には、このような対等の並列関係は成立しにくいのではないかと思われる。それは、(29)のような並列表現に用いられる二つの用言(「聞き」と「見ず」)が、連用修飾要素をほぼ均等に持つ(「音に」と「日には」)のに対し、用言連続体を用いる表現においては、両用言の持つ連用修飾要素の間に不均衡が認められるからである。

もう少し具体的に説明したい。一般的に、連用修飾要素(「こ」では、主語などの場合も含む、広い意味で用いる)は、直接には、前項用言か後項用言かのいずれかにかかるものであって、両方の用言にかかるということはない。次

の二つの例で言えば、

(30) 吾が背子が 朝明の姿 よく見ずて 今日の間に、恋

ひ暮らす、かも(今日間 戀暮鴨)(巻十二、二八四)

(31) 越の海の 信濃の浜を 行き暮らし、(信濃乃波麻乎  
由伎久良之) 長き春日も 忘れて思へや(巻十七、  
四〇二〇)

(30)は、後項用言「暮らす」が連用修飾要素「今日の間に」を独占して一つのことごらがらを表し、残った前項用言「恋ひ」は、成立するそのことごらがらをさらに限定するはたらきを果たすに留まると解釈される。(31)は逆に、前項用言「行き」が連用修飾要素「越の海の信濃の浜を」を独占して一つのことごらがらを表しているのであるが、一旦成立したそのことごらがら全体が再度連用修飾要素となつて、後項用言「暮らす」を修飾していると考えられよう。「暮らす」は、前項用言「行き」に対して補助用言的にはたらいているとも考えられるが、それも、「越の海の信濃の浜を」が「暮らす」にかかる連用修飾要素であることに基づくものである。(30)(31)いずれの場合にも、二つの用言は、対等の並列関係ではなく、前項用言が後項用言を修飾する関係にあると理解されるのである。

右のような関係は、用言連続体に係助詞の介入する、本稿のいわゆる近接型においても同様に認められるのではないかと思われる。

(32) 韓衣 君にうち着せ 見まくほり 戀其晩飾之(こひ  
そくらしし) 雨の降る日を(卷十一、二六八二)

(32)の「恋ひ(そ)暮らす」の前項用言「恋ひ」も、「雨の降る日を」暮らす」ということがどのように成立するかを限定する、連用修飾要素と位置づけるべきであろう。しかもそれは、「恋ひ」と「暮らす」との両用言にかかる修飾要素の間に不均衡が存在することの、殆ど必然的な結果とも言うべきものである。

このように、用言連続体における両用言の間の関係は、連用修飾関係に大きく偏っている。もちろんその連用修飾関係は、中間にさまざまな段階を媒介させつつ、結局は並列関係に連続するものである。しかしその両用言が持つ修飾要素の不均衡という事実注目するときには、両用言の関係は、一旦は並列とは決定的に異質であると理解せねばなるまい。このことは、これまで見てきた用言連続体の多くが、後の時代において一つの複合用言へと統合してゆくこと、そしてその複合用言において、一般的に、単純な

並列の関係で構成されるものが少数に留まること(影山太郎氏『文法と語形成』p.100、ひつじ書房、一九九三)などによる指摘がある)からも、傍証されるであろう。

もつとも、(33)の「咲き散る」のような例は、一見、「咲く」と「散る」とが並列されている例外と思われるかもしれない。しかしこの場合についても、(34)のような例を参考に、「咲き、そして散ってゆく」とでも言うべき時間的前後の関係を認めるべきではないかと思われる。

(33) 高圓の 野辺の秋萩 徒に 開香罍散(さきかちる;  
らむ) 見る人なしに(卷二、二二二)

(34) うぐひすの 音聞くなへに 梅の花 我家の苑に 佐  
伎弓留美由(さきでちるみゆ)(卷五、八四二)

そう考えるとこの「咲き散る」の場合も、先行のことがら「咲く」は、意味の上で、後続のことがら「散る」の背景と化している、と解釈するのが妥当ではなからうか。

近接型については、用いられている係助詞の意味の及ぶ範囲に関連して、第五節においてなお論ずべきことが残されている。しかし、なぜ(形容詞型以外の場合)、カ・ヤ・ソが下接する用言連用形が用言連続体の前項用言に限ら

れるのか、という問題については、本節に論じた範囲で、十分に説明が可能であろう。

係助詞カ・ヤ・ソの下接は、並列関係を表す要素に対しては許されないものであったと考えられる。これらの係助詞の持つ性質は、並列関係と相容れない面を持つからである。しかし用言連続体における前項用言は、形の上でその連用形を取って後項用言に連結しているものの、二つの用言が連続するというその構成上、殆ど必然的に連用修飾の関係を表すものであった。それは、反面から言えば、並列の関係からは遠ざかるものと位置づけられよう。そのため、並列関係とは相容れないカ・ヤ・ソも、下接することが許されるのである。

言うまでもなく、以上のような説明は、前節に検討した、「連用形＋テ」の形式に対する係助詞の下接についての説明をなぞるものである。用言連続体内部における二用言間の関係と、「連用形＋テ」の接続法における二事態間の関係とは、並列を離れ連用修飾に接近するという点で共通し、そのために両者いずれの場合においても、カ・ヤ・ソが下接することが可能となるのだと考えられる。次に挙げる二つの例、(35)「鳴き(カ)越ゆ」と(36)「鳴きて越ゆ」との間には、カの有無を除けば意味上の違いが殆ど認められないが、

(35) 吾がここだ 偲はく知らに 霍公鳥 いづへの山を

鳴可將超 (なきかこゆらむ) (巻十九、四一九五)

(36) 木の暗の 繁き峯の上を 霍公鳥 奈伎弓故由奈理

(なきてこゆなり) 今し来らしも (巻二十、四三〇

五)

ここに、両者の共通性を端的な形で看取できるのではないかと思われる。

ところで、第一節にAとして指摘した現象、すなわち「カ・ヤ・ソは、形容詞型以外の用言の連用形に対しては、用言連続体の前項用言に限って下接する」という現象には、これまで論じてきたことの裏の面とでも言うべき、もう一つの問題がひそんでいる。それは、なぜ形容詞型用言の連用形に限って、自由な環境で係助詞が下接しうるのか、ということである。そしてこれについても、これまでと同じ論法を繰り返すことによつて、容易に説明できるのではないかと思われる。

形容詞が、意味の上で、もの・ことの性質や状態を表すという特徴を持っていることは、改めて確認するまでもないことであろう。従つてそれが連用形で用いられるときに

は、動詞連用形のように並列関係を表すのではなく、連用修飾の関係を表すことを、第一のはたらきとする。このことは、萬葉集における形容詞連用形の例の大半を連用修飾用法が占めていることから、実証されるであろう（大森一浩氏〔「上代形容詞連用形の一側面―萬葉集においてミ語法との関係から―」本誌第六号、二〇〇二〕の調査による）。形容詞連用形は、連用修飾の関係を表す際、被修飾語の直前に位置することも、テを伴うことも、必要としない。もちろん、(37)のように、並列表現に用いられる例も皆無ではないものの、

(37) 山高来(やまたかく) 川の瀬清し、 百世まで 神し

みゆかむ 大宮所(巻六、一〇五二)

少なくとも、二つの事態の並列を表すことを基本とする動詞連用形との間に、決定的な異質が認められることは疑われないであろう。形容詞連用形は、連用修飾関係をより積極的に表す一方、並列関係からは遠ざかると考えられるのである。だからこそ、動詞連用形の場合とは異なり、並列

とは相容れない係助詞の下接が、自由な環境において可能となっているのである。

ただし、第一節にBとして述べたように、カに限っては、ヤ・ソと異なり、形容詞型用言の連用形に下接する例が存在しない。そしてこの現象は、係助詞一般としての性質によるものではなく、カを持つ固有の性質に基づくものなのではないかと思われる。では、そのカに固有の性質とは、どのようなものであったのだろうか。次節以降では、この点に注目しつつ、連用形とカをめぐる問題について、考えて行くことにしたい。

引用に用いた文献は以下の通り(萬葉集からの用例は、読解の便のため、注目部分以外は『萬葉集訳文篇』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 瑠書房、一九七二)を参考に適宜表記を改めた)。

萬葉集 『萬葉集本文篇』(補訂版) 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 瑠書房、一九九八(旧版は一九六三)

(つた きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター講師)